

大空 (生徒・保護者向け) 40号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 校長通信

令和3年7月7日(水)

分かったつもりの罫(高校3年ポスターセッション挨拶)

□本日の概要

- 本日伝えたいN F C
感性 探究心 自他肯定力 協働力 創造力
- 本来、科学には限界があるが、私たちは科学を絶対視し、科学全てが理解できてしまったかのような錯覚に陥っている。
- 科学の発達により、私たちは様々なことが分かったような気持ちになっているが、この「分かった」という気持ちは「分かつた」という探究心を阻害する危険がある。
- 大切なのは、科学の原点である「分からない、不思議だ、何故だろう」という気持ちを持ち続けることである。「無知の知」を大切にしたい。

□専門家を過信し、科学を絶対視しすぎた私たち

素直な疑問符

吉野 弘

小鳥に声をかけてみた
小鳥は不思議そうに首をかしげた。

わからないから
わからないと
素直にかしげた
あれは
自然な、首のひねり
てらわれない美しい疑問符のかたち。

時に
風の如く
耳もとで鳴る
意味不明な訪れに
私もまた

素直にかしぐ、小鳥の首でありたい。

これは、私の好きな詩人、吉野弘さんの詩です。

私は、国語の先生です。理数は特に苦手な分野ですが、科学の専門家としてではなく、門外漢の立場から、今、「科学」について考えていることをお話ししたいと思います。

2011年の東日本大震災以来、私たちは、あらゆるものに対する価値観の変化に直面していると言っても過言ではありません。特に、福島第一原発の事故は、私たちに大きな衝撃を与えました。

原発は、当時、絶対安全で低コストと言われていました。しかし、2011年の震災は、私たちに「絶対」というものが存在しないことを教えてくれました。同様に、科学技術は決して万能ではなく、専門家も絶対ではありませんでした。最近の新型コロナウイルスについても、ワクチンは開発されたものの未だ特効薬はなく、科学は有効な手立てを打てないでいます。

しかし、私は、「専門家が嘘をついていた」「科学は役に立たない」と批判したいのではありません。専門家を「過信」し、「科学」を絶対視しすぎてきた、私たちの在り方を考えて欲しいのです。

本来、大自然には、人間の力を遙かに超えた力があり、その自然に対する謙虚さを持って、私たちは、科学と接していかなければならなかったのだと思います。それなのに、いつしか、私たちは、科学で全てが理解できてしまったかのような錯覚に陥っていました。「科学」は、一つのものの見方であり、優れた面もあれば限界もある。人間は科学技術抜きで生きることはで

きないが、科学技術に依存しすぎてもいけない、そのような、「適度な距離感」というものも忘れてしまっていたのではないのでしょうか。

□「不思議だ」という気持ちを阻害する科学

また、科学は、本来、人間の知的好奇心、大自然に対する「不思議だ」という気持ちや、「感動」を原点として生じたものだと思います。古来、人は、星のまたたきから、自分の肉体に至るまで、あらゆることに対して「不思議だ」という気持ちを持ち、その神秘を解き明かそうとしてきました。その過程で、科学が生まれてきたのだと思います。

しかし、今や、逆に「科学」が、私たち自身が原初の頃に持っていた「不思議だ」という気持ちを阻害してしまっているのではないのでしょうか。

例えば、どこにでもある蛍光灯、今ではLED照明に変わろうとしています。これは科学技術が生み出したものであり、原理は電気の力によるものだと私たちは理解しています。しかし、そう「分かった」とたん、私たちには、もうそれ以上、「これはどういう原理で光るのか？」ということを探究しようという気持ちが起こらなくなってしまいます。考えて見れば、電灯一つをとっても、相当複雑な原理や技術が使われているはず。エジソンが、試行錯誤を重ねて白熱球の原型を発明した頃とは、格段の進歩があるでしょう。もし、エジソンがここにいたら、感動のあまり飛び上がるかもしれません。

しかし、今の若い人にとっては、このような科学技術は生まれたときから当たり前の様に存在していたのです。テレビもカラーが当たり前、車も、新幹線も、コンピューターも、スマホも、夢物語ではなく、現実のものとして育った世代です。動物や人間の現象についても、すぐに科学的な分かりやすい説明がなされ、「分かって」しまう。インターネットで検索すればすぐに答えが出てしまう。すると、それ以上、「何故だろう」という探究心が起こりにくくなってしまいます。自然現象や科学技術に対する感動が希薄なのです。

逆説的ですが、「分かった」という気持ちは、

人の探索行動を妨害してしまいます。細部を見ようという気持ちを阻害します。改めて問い直すと、物事の表面だけを眺めていて、実は何も分かっていないことが多いのです。これは、文系分野でも同じです。文章の表面だけを眺め、細部は分かっていないのに、何となく分かった気持ちになっている。すると、それ以上、読みが深まりません。むしろ、「分かった」ではなく、「分からない」「何故だろう」という気持ちが、今、大切なのではないのでしょうか。

□「無知の知」の重要性

皆さんには、単なる物知りになって欲しくはありません。敢えて、「頭の悪い」人になって欲しいと思います。物わがりの良い大人ではなく、科学の原点である、「分からない、不思議だ、なぜだろう」という気持ちを持ち続けている、永遠の子供であって欲しいと思います。

「分からないこと」を「分からない」と素直に表明できること。自分の「分からなさ」に気づくことができること。そして、その「分からなさ」と向きあい、分かろうと問い続けていけること。これは、科学者のみならず、人として大切な資質ではないのでしょうか。哲学者ソクラテスは、「無知の知」という考え方にいたりしましたが、これは、「自分がいかに無知であるかを自覚せよ」ということです。無知は恥ずかしいことではなく、探究活動の原点なのです。

皆さんは、これから出会う様々な「分からなさ」や、様々な人との出会いを契機として、「問い」を持ち続け、常識を疑い続ける人に変容して欲しいと思います。これを、批判的思考力といいます。今日は、自分の発表だけでなく、友だちの発表を聞いて、自分の視野を広げてください。

未来は、君たちの「疑問を持つ心」にかかっています。今日の発表会を楽しんでください。

○参考図書

「わたったつもり～読解力がつかない本当の原因～」(光文社新書)西林克彦